あ と が き

本書のもととなった研究のアイデアは，2005年の春，当時私が勤めていた東京大学の近くにある店での小松久男先生との話から生まれた．今でこそ，記憶に関する研究は多様な分野で注目されており，人類学者や政治学者による研究成果が次々と発表されている．しかし2005年の段階では，記憶，特に中央アジア地域における記憶と一般の人々についての研究はまだそれほど話題に上ってはおらず，研究者の多くは中央アジア諸国のソ連時代の過去というよりも，これからの発展に目を向けていた．

その中で，私と小松先生の共通の考えとして，「過去と現代の関連は重要であり，過去をどのように解釈するかによって現代がみえ，逆に，現代の解釈により過去の見方が変わる」という視点が生まれた．さらに，過去をどのようにより客観的に，また，当時の出来事をより忠実に描けるかについて話し合う中で，やはり政治的なイデオロギーと一般の人々の生活との間には乖離があり，政治家からみえる「現状」と一般国民からみえてくる「現状」には差異が存在することに着目しなければならないことも明らかとなった．

こうした中から，政治家たちと異なって，自らの意見や考えを表明する機会や手段をもたない一般の人々それぞれが置かれている「現状」にこれまで着目してこなかった点を省察し，ソ連時代を一般の人々の日常生活に関する記憶の観点から再考しようというプロジェクトが生まれた．

このような一般国民の日常生活から検討する歴史の重要性は，中央アジア地域においては特に高いといえる．なぜなら，これまでのソ連中央アジアの歴史の叙述では，つねに「現代」の美化と「昔」の批判が前提とされていたからである．例えば，ソビエト政権が確立すると，ハン国や帝政ロシアの時代が「暗黒期」として批判された．ソ連の時代において，ある指導者が前指導者の批判を展開したのもその一例といえる．

ソ連崩壊直後においても，ソ連から独立を獲得してリーダーとなった指導者

は，ソ連時代を批判し，「現代」を美化している．独立以降も，後続の政治家が前の指導者を批判することで，自身の政治体制や功績を持ち上げる．それはウズベキスタンのみならず，2005年のキルギスのチューリップ革命や，2010年の同国における政変などの例からもいえることである．このような批判と美化は両極端の現象であり，指導者が変わると同時に歴史の見直しや書き直しが行われ，それは世代間での歴史認識の格差を生じさせるに至った．そして，それは社会に亀裂をもたらす要因にもなったのである．

また，今回のプロジェクトを立ち上げた理由の一つに，ソ連時代を単に白黒に分けて再検討するのではなく，これまでに多くのことを経験してきたお年寄りたちの記憶を記録，保存し，これを次の世代に伝えていくということがあった．このような記憶の継承により，一般の人々の目線に立った「市民史」の史料を蓄積し，イデオロギーばかりが先行する中央アジア現代史ではなく，一般の人々の見方も反映した歴史叙述に貢献することが可能となるだろう．

以上の認識から，私はこれまで，『マハッラの実像』（東京大学出版会，2006年）と『社会主義後のウズベキスタン』（アジア経済研究所，2008年）を発表しているが，これらは独立後の国家と社会の状況に焦点を置いたものである．本書ではソ連時代の社会状況や国民の日常生活と記憶を取り上げたが，そこでは，私がこれまでの著書で引用したインタビューなども部分的に使われており，これらの研究成果は相互に連関するものとなっている．

私のこれまでの研究と連関する本書の主要なメッセージとして，一般の人々の政治観は既述の「批判」と「美化」という極端な見方の中間にあるものであり，一般国民による各時代の評価はイデオロギーと教育という重要な要因に加えて，当時の経験と日常生活によって形成されることが多いことを強調しておきたい．

このことから，本書はウズベキスタンを一つの事例として，ソ連時代を生きた人々の生の声を可能な限り届けることで，彼らの生活の実態を伝えるとともに，中央アジアの将来について検討することをめざした．本書は日本語での刊行であるが，インタビューや調査の際に回答者からは，このようなソ連時代に関する研究を母語でも読んでみたいという声があり，私と研究協力者にとって

はそれが大きな励みになった．中央アジアの政治環境が整った段階で本書のロシア語やウズベク語などへの翻訳が，今後の課題の一つとして挙がっている．

本研究を進める上で，私は多数の研究者の助言やコメントをいただいた．なかでも，人間文化研究機構（NIHU）プログラム「イスラーム地域研究」の東京大学拠点リーダーである小松久男先生の役割を特に強調したい．まず，研究対象の特定と現地調査の段階では，調査の方法と内容について，小松先生と協議しながら現地調査を実施し，数年にわたりウズベキスタンとキルギスの各地をともに歩き回った．また，本書の最終原稿についても，歴史に関する章の全面的な書き直しに多大な協力をいただいたと同時に，ご多忙にもかかわらず，本書の各章にわたって様々な側面から貴重な助言，コメントをいただいた．本書が包含する弱点のすべてを克服することはかなわなかったが，それらを問い直す上で小松先生からの助言，コメントは大きな助けとなった．小松先生の歴史観や，一般の人々の経験とその記憶を歴史の重要な史料として扱うべきであるという考え方は，私に多大な影響を与え，ウズベキスタンのみならず，中央アジアが孕む様々な問題を考える上での基礎となった．当初の予定では，本書は小松先生との共著となるはずであったが，様々な理由により最終的には私の単著となった．しかし，小松先生からの多岐にわたる助言や支援なくして本書は完成しなかっただろう．小松先生に，改めて深く御礼申し上げたい．

現地調査と日本における資料分析においては，数多くの研究者の協力を得た．まず，現地調査では，数年間にわたって聞き取り調査やその分析を手伝ってくれた世界経済外交大学のRakhmov Farmonov教授，Qodir Juraev助教授（2010年以降，ウズベキスタン共和国国会議員）とBaxtiyor Xikmatullaev氏に深く感謝する．また，日本においては，筑波大学と同中央アジア国際連携センターの小野澤正喜先生，西村よしみ先生，臼山利信先生，河野明日香先生と塩谷哲史準研究員に様々な場面で支援をいただいた．ここに，改めて感謝申し上げる．本書の原稿作成やデータ整理などでは，井上実佳先生（広島修道大学）に多大な協力をいただいた．最終原稿の校正と修正では，よりわかりやすい日本語の表現となるよう様々な助言を前田（田村）文乃氏にいただいた．この場を借りて，厚く御礼申し上げる．

最後に，本書の刊行を引き受けていただき，原稿完成を忍耐強く待ってくださった筑波大学出版会，特に編集長の谷川彰英先生，波多野澄雄先生，諸先生方，そして作業を担当してくださった職員の方々に，深く感謝申し上げたい．